

シャロン・ケイ，ポール・トムソン 著
河野哲也 監訳

『中学生からの対話する哲学教室』

玉川大学出版部 2012年 単行本 188頁 ¥2,520 (税込)

西山 溪

嘘をつくことは絶対に悪いことなの？—あなたが自分の子どもや生徒にこのようなことを尋ねられたらどう答えるだろうか？ 嘘はいつも悪いことだ、と言うのであれば、すぐさま「でも、本当のことを言うと、かえって人を傷つけることがあるよ」という答えが返ってくるだろう。嘘はついてもいい時がある、と言えば、「じゃあどんな時なの？」と言われるだろう。私たちがふだん「悪」だと思っている「嘘」は、少し掘り下げて考えるだけでも、そう簡単に答えが出せるものではないのだ。この問いに対して考える手がかりを求める方には、本書第6章「嘘をつくのはいつも悪いことか」のページを開くことをおすすめする。

本書はアメリカで用いられている哲学の教科書の翻訳である。哲学という言葉を知ると、「偉そうな人が難しいことを話しているもの」などといったイメージが先行しがちで、それだけで身構えてしまう人も多いだろう。ところが先の「嘘」というテーマをはじめとして、第1章「愛とは何か」、第10章「動物には権利があるのか」、第13章「善人に悪いことが起きるのはなぜか」といったように、簡単には答えの見えてこないような興味深い哲学的なテーマが並んでいる。

本書において重要な点は、タイトルにあるように「対話する」という点である。哲学の問いには、答えが一つに収束するような決まった解答は存在せず、それゆえに問いに対して一人一人がさまざまな「答え」を有している。たとえば「愛とは何か？」という問いにはいろいろな答え方があるように。このような問いに対して、一人だけで考えることももちろん重要であるが、対話を通して自分以外の他者の意見に出会うことによって、これまで自分が「あたりまえ」と思っていた価値観、常

識、前提を問い直すことができ、より多角的なものを見方ができるようになる。哲学対話はこのような可能性を秘めている。

さらに特筆すべきは、本書の構成である。すべての章で、二人の登場人物があるテーマ（たとえば「愛」など）をめぐって対話するところから始まり、そのテーマについて哲学史上どのような議論がなされてきたかを簡単に紹介し、その後「討論すべきテーマ」としていくつかの問いがあげられている。なかでも注目すべきは、各章ごとにある「社会活動へのステップ」というセクションである。訳者の河野哲也は「考えるだけで終わるなら哲学とは言えない（「監訳者のことば」より）」と述べているように、本書には哲学対話を通して得たものを、教室を飛び出して哲学を社会で役立てようという態度が現れている。たとえば先の6章「嘘をつくのはいつも悪いことか」では、「政治家が語る嘘をあばくために、グループで地域の新聞の編集部に投書する」や、第11章「だれが環境のことを考えるのか」では「近隣地域のリサイクル計画を立てる」といった具合である。

本書を手にして、「理屈はわかるし、実際にやってみたいけれども、自分の所の生徒は本当に哲学的な対話ができるのだろうか」「いったいどのように授業をすればいいかのイメージがわからず、自分にはできないのではないかと感じる方もいるだろう。そのような方、本書の内容を実践しようと考えている方に対して、「先生のための付録」が巻末に付されている。どのように授業を始めればいいのか、どのように終わらせるか、評価はどうするのかといった事柄について手引きがなされているほか、ワークシートなども付されている。単なる理論のみに収まるのではなく、哲学すること一人でも多くの人に実践の場で使えるようになってほしいという著者そして訳者たちの願いが、ここに込められている。

このような点から、本書は教育に対話を取り入れようと考えている教師だけでなく、これから教師を志そうとしている学生にとっても必読の一冊となるだろう。